

一般化運動方程式

2012年3月17日

1 イントロ

スクレロノーマスな場合の拘束条件について、一般化座標と一般化力の関係を一般化運動方程式で表現する。

2 スクレロノーマスな一般化運動方程式

「配位空間と仮想仕事の原理」で述べたとおり、一般化仕事とは

$$\mathcal{F}_i = \sum_{\alpha} m_{\alpha} \left(\ddot{\mathbf{r}}_{\alpha} \cdot \frac{\partial \mathbf{r}_{\alpha}}{\partial q^i} \right)$$

であった。

$$\frac{d\mathbf{r}_{\alpha}}{dt} = \frac{\partial \mathbf{r}_{\alpha}}{\partial q^j} \frac{dq^j}{dt}$$

より

$$\frac{d^2\mathbf{r}_{\alpha}}{dt^2} = \frac{\partial \mathbf{r}_{\alpha}}{\partial q^j} \frac{d^2q^j}{dt^2} + \frac{\partial^2 \mathbf{r}_{\alpha}}{\partial q^j \partial q^k} \frac{dq^j}{dt} \frac{dq^k}{dt}$$

これより

$$\mathcal{F}_i = \sum_{\alpha} m_{\alpha} \left[\left(\frac{\partial \mathbf{r}_{\alpha}}{\partial q^i} \cdot \frac{\partial \mathbf{r}_{\alpha}}{\partial q^j} \right) \frac{d^2q^j}{dt^2} + \left(\frac{\partial \mathbf{r}_{\alpha}}{\partial q^i} \cdot \frac{\partial^2 \mathbf{r}_{\alpha}}{\partial q^j \partial q^k} \right) \frac{dq^j}{dt} \frac{dq^k}{dt} \right]$$

となる。(リーマン幾何知っている人はどっかで見たような式ですね・・・)

ここで

$$m_{ij} = \sum_{\alpha} m_{\alpha} \left(\frac{\partial \mathbf{r}_{\alpha}}{\partial q^i} \cdot \frac{\partial \mathbf{r}_{\alpha}}{\partial q^j} \right)$$

と置くと、これは i, j について対称行列である。

さらに、2階の共変テンソル(の成分であることもすぐ分かる。

すなわち、

$$q'_i = a_{ij} q_j$$

の変数変換に対し

$$m'_{ij} = a_{ik}^{-1} a_{jl}^{-1} m_{jl}$$

となる。(ここでは、上付き、下付きは特に変換則を表しているわけではない。)

したがって、 $m_{i,j}$ は微分幾何で言うところの計量 (の成分) の資格がある。

この計量は実は運動エネルギーを図る意味での計量となっていて

$$T = \frac{1}{2} \sum_{\alpha} m_{\alpha} \frac{dr_{\alpha}}{dt} \cdot \frac{dr_{\alpha}}{dt} = \frac{1}{2} m_{ij} \frac{dq^i}{dt} \frac{dq^j}{dt}$$

となっている。

さらに第一種クリストッフェル記号

$$\Gamma_{ijk} = \sum_{\alpha} m_{\alpha} \frac{\partial r_{\alpha}}{\partial q^i} \cdot \frac{\partial^2 r_{\alpha}}{\partial q^k \partial q^j}$$

を定義すると $\Gamma_{ijk} = \Gamma_{ikj}$ と、後ろ二つについて対称で

$$\frac{\partial m_{ij}}{\partial q^k} = \sum_{\alpha} m_{\alpha} \left(\frac{\partial r_{\alpha}}{\partial q^i} \cdot \frac{\partial^2 r_{\alpha}}{\partial q^j \partial q^k} + \frac{\partial r_{\alpha}}{\partial q^j} \cdot \frac{\partial^2 r_{\alpha}}{\partial q^i \partial q^k} \right) = C_{ijk} + C_{jik}$$

同様にして

$$\begin{aligned} \frac{\partial m_{ij}}{\partial q^k} &= \Gamma_{ijk} + \Gamma_{jik} \\ \frac{\partial m_{jk}}{\partial q^i} &= \Gamma_{jki} + \Gamma_{kji} \\ &= \Gamma_{kij} + \Gamma_{ikj} \end{aligned}$$

より

$$\Gamma_{ijk} = \frac{1}{2} \left(\frac{\partial m_{ki}}{\partial q^j} + \frac{\partial m_{ij}}{\partial q^k} - \frac{\partial m_{jk}}{\partial q^i} \right)$$

を得る。

最後に、力 F_{α} がポテンシャル $U(r_1, \dots, r_N)$ によって与えられるとすると

$$F_i = \sum_{\alpha} F_{\alpha} \cdot \frac{\partial r_{\alpha}}{\partial q^i} = - \sum_{\alpha} \frac{\partial U}{\partial r_{\alpha}} \cdot \frac{\partial r_{\alpha}}{\partial q^i} = - \frac{\partial U}{\partial q^i}$$

以上から

$$\mathcal{F}_i = m_{ij} \ddot{q}^j + \Gamma_{ijk} \dot{q}^j \dot{q}^k$$

となり、一般化運動方程式を得る。

m_{ij}, Γ_{ijk} は配位空間の幾何学的な量で、その様な量で方程式が特徴づけられているところに意味がある。(詳しくはリーマン幾何を参照)

3 二次元振り子

原点 O から長さ l の十分軽く変形しない棒の先に取り付けられた質量 m の質点の一樣重力 mg 中の運動を解く。

棒から受ける張力を S とすると、普通の運動方程式は

$$m \frac{d^2 \mathbf{r}}{dt^2} = mg + S$$

となる。

拘束条件は

$$|\mathbf{r}| - l = 0$$

となる。

さて、これを上の処方箋に従って解いてみよう。

まず、

$$x = l \cos \theta$$

$$y = l \sin \theta$$

と極座標系を導入すると (自由度 1) 運動エネルギーは

$$T = \frac{m}{2} (\dot{x}^2 + \dot{y}^2) = \frac{ml^2 \dot{\theta}^2}{2}$$

より

$$m_{\theta\theta} = ml^2$$

となる。よって、クリストッフェル記号は

$$\Gamma_{\theta\theta\theta} = 0$$

また、一般化力は重力ポテンシャルを $mg y = mgl \sin \theta$ とすると

$$F_i = -\frac{\partial U}{\partial \theta} = -mgl \cos \theta$$

より一般化運動方程式は

$$ml^2 \ddot{\theta} = -mgl \cos \theta$$

(θ は x 軸から図っていることに注意)

この方程式は周期を求めるだけなら楕円積分とかでできる。

θ が十分小さいところでは良く似た振り子の式となる (x 軸から角度を測っている事に注意。)

4 三次元振り子

二次元と全く同じだが、座標系としては球座標を採用して

$$\begin{aligned}x &= l \sin \theta \cos \phi \\y &= l \sin \theta \sin \phi \\z &= l \cos \theta\end{aligned}$$

とする。(自由度は2)

そうすると、

$$\mathbf{r} = l \sin \theta \cos \phi \mathbf{e}_x + l \sin \theta \sin \phi \mathbf{e}_y + l \cos \theta \mathbf{e}_z$$

より

$$\begin{aligned}\frac{\partial \mathbf{r}}{\partial \theta} &= l \cos \theta \cos \phi \mathbf{e}_x + l \cos \theta \sin \phi \mathbf{e}_y - l \sin \theta \mathbf{e}_z \\ \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial \phi} &= -l \sin \theta \sin \phi \mathbf{e}_x + l \sin \theta \cos \phi \mathbf{e}_y\end{aligned}$$

より

$$\begin{aligned}m_{\theta\theta} &= ml^2 \\ m_{\theta\phi} &= m_{\phi\theta} = 0 \\ m_{\phi\phi} &= ml^2 \sin^2 \theta\end{aligned}$$

となり、クリストッフェル記号は

$$\begin{aligned}\Gamma_{\theta\theta\theta} &= 0 \\ \Gamma_{\theta\theta\phi} &= \Gamma_{\theta\phi\theta} = 0 \\ \Gamma_{\theta\phi\phi} &= -ml^2 \sin \theta \cos \theta \\ \Gamma_{\phi\theta\theta} &= 0 \\ \Gamma_{\phi\theta\phi} &= \Gamma_{\phi\phi\theta} = ml^2 \sin \theta \cos \theta \\ \Gamma_{\phi\phi\phi} &= 0\end{aligned}$$

となる。

ポテンシャルは $U = mgz = mgl \cos \theta$ なので、一般化力は

$$\begin{aligned}\mathcal{F}_\theta &= mlg \sin \theta \\ \mathcal{F}_\phi &= 0\end{aligned}$$

以上から一般化運動方程式は

$$\begin{aligned}ml^2 \ddot{\theta} - ml^2 \sin \theta \cos \theta \dot{\phi}^2 &= mgl \sin \theta \\ ml^2 \sin^2 \theta \ddot{\phi} + ml^2 \sin \theta \cos \theta \dot{\theta} \dot{\phi} &= 0\end{aligned}$$

と求まる。

5 疑問点とか

一般化運動方程式では、うまく変数を選べば拘束力を完全に問題から除外する事ができる。
うまく変数を選ぶというのは、自由度を落として、拘束条件が初めから満たされているような変数の取り方である。
もし、振り子のケースで直交座標とすると、拘束条件を外す事ができないので、拘束条件付き微分方程式を解く必要があり、まず解けないし、数値解析も大変。